

# 上顎第 1 大臼歯に認められた低位歯の 1 例

小 松 賢 一      高 木 律 男      大 橋      靖  
鈴 木      誠\*

新潟大学歯学部口腔外科学第 2 教室

(主任：大橋 靖教授)

\*新潟大学歯学部口腔病理学教室

(主任：石木哲夫教授)

Depressed maxillary first molar : Report of a case.

Ken-ichi KOMATSU, Ritsuo TAKAGI, Yasushi OHASHI  
Makoto SUZUKI\*

*Second Department of Oral and Maxillofacial Surgery,  
School of Dentistry, Niigata University  
(Director: Prof. Yasushi OHASHI)*

*\*Department of Oral Pathology, School of Dentistry,  
Niigata University  
(Director: Prof. Tetsuo ISHIKI)*

Key words: 低位歯／上顎第 1 大臼歯／成人

## 緒 言

上顎，下顎にかかわらず第 1 大臼歯には異常が生じにくいとされている。歯の異常のうち，歯の埋伏が第 1 大臼歯にみられる頻度は，全埋伏歯の 1%以下にすぎない<sup>1-3)</sup>。一方，歯が低位にとどまり咬合線上に達しない低位歯の概念があり，乳歯でよくみられるが，まれに永久歯でも起こるとされている<sup>2,4)</sup>。低位歯か埋伏歯かの鑑別にあたっては詳細な臨床的観察が必要となる。今回私達は上顎第 1 大臼歯が半埋伏状態を呈する症例で，病歴，現症から 2 次的に低位をきたしたいわゆる低位歯と最終診断した 1 例を経験したのでその概要を報告する。

患 者：20歳，男性。

初 診：昭和62年 5 月19日。

主 訴：76 部食片圧入。

既往歴：生下時，1,900 g と低体重であったが，その後の発育は順調であったという。8,9 歳頃，頬部を野球バットで殴打されたが，左右の別は記憶にない。

家族歴：特記事項なし。

現病歴：小学校高学年時，6 部の歯痛のため某歯科受診，充填処置を受けたという。数年前から 6 が周囲の歯に比べ低いと感じるようになり，1 年ほど前からは 76 部への食片圧入が気になり，昭和62年 5 月初め，某歯科に相談したところ，当科紹介され，来院した。

## 症 例 現 症

全身所見：体格，栄養中等度。

口腔外所見：特記すべき所見はない。

口腔内所見：6は歯列弓内よりわずかに舌側に位置し，歯冠の一部が露出しているがその高さは5と7の歯頸部近くまでしかなく，周囲から陥没したようになっている。咬合面中央と遠心舌側窩にアマルガム充填がなされている。遠心舌側窩から遠心部は深い歯質の崩壊が認められ息肉状の歯肉で満たされている。打診痛，動揺とも認められない。対合歯の挺出はみられない。周囲の歯肉，口腔粘膜には異常はない(図1)。5は軽度遠心に，7は軽度近心かつ頬側に傾斜し近遠心間距離は7.1mmである。ちなみに反対側の5，7間の距離

すなわち6の幅径は10.9mmである。5 4 3の歯間が開離し，4はわずかに遠心に捻転している(図2)。

X線所見：6の歯冠部髓腔から髓床底にまで及ぶ大きな不透過像を認め，口蓋根の髓腔は開大し，また，その根尖は丸みを帯びた台形状を呈する。歯根膜腔，歯槽硬線は不明瞭である(図3)。

臨床診断：6低位歯の疑い。

処置及び経過：昭和62年6月25日，全麻下に6の抜歯を埋伏歯抜去術に準じた方法で施行した。7—4部の粘膜骨膜弁を剥離すると6歯冠頬側面の約1/4が露出した。頬側の歯槽骨を根尖まで削除した。6はちょうど7近心歯頸部のアンダーカットに入り込んでいた(図4)。骨削除は比較的容



図1 口腔内写真(鏡像)

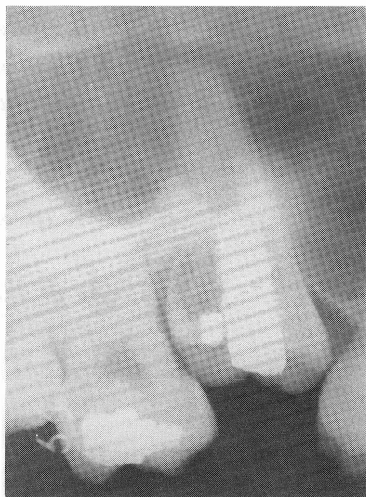


図3 歯科用X線写真

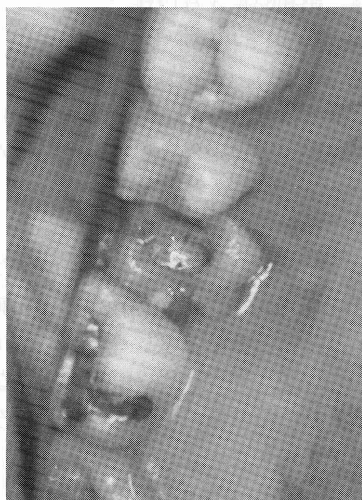


図2 口腔内写真(鏡像)

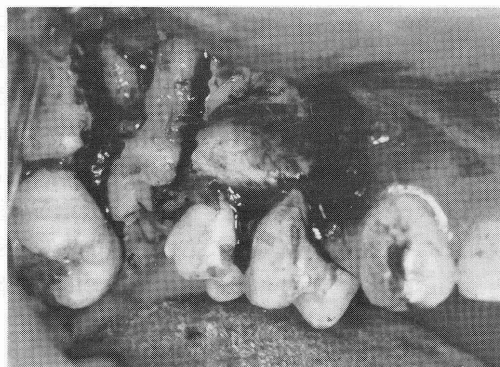
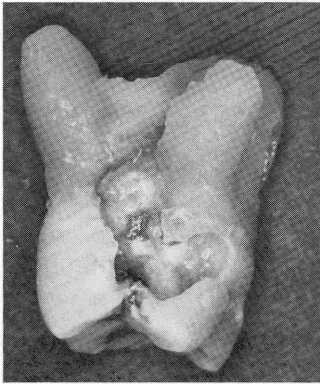


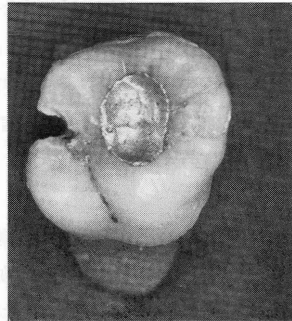
図4 手術時写真



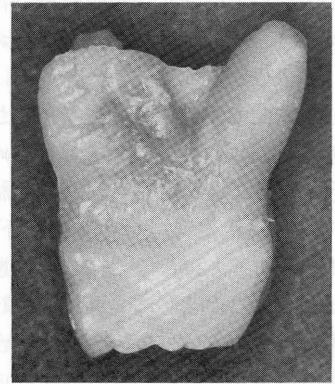
頬側面観



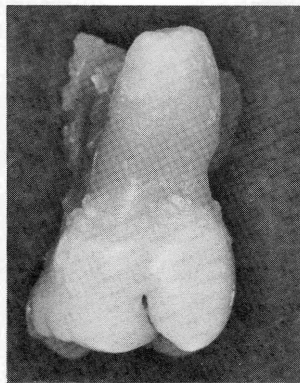
遠心隣接面観



咬合面観



近心隣接面観



舌側面観

図5 抜去歯

表1 歯の計測値 (単位: mm)

	歯の全長	歯冠長	歯根長	歯冠幅	歯冠厚
6(抜去歯)	17.0	6.7	10.3	11.2	11.5
6(模型上)				10.9	11.4
6(藤田 <sup>5)</sup> )	19.2	7.2	12.0	10.6	11.8

易で、骨の硬さ、色調等にも異常なく、歯との癒着も認めなかった。頬側根尖は上顎洞に突出していた。楔子により容易に脱臼し、抜歯鉗子で抜去した。6遠心に少量の不良肉芽を認めた。口蓋根も上顎洞と交通し、頬側弁で穿孔を閉鎖し、手術を終了した。創の治癒は良好であった。

抜去歯所見(図5):咬合面では中央部および遠心舌側窩にアマルガム充填がなされており、また、近心舌側咬頭に軽度の咬耗を認めた。頬側面で歯冠のほぼ1/2の高さに帯状の脱灰、着色部がみられた。舌側面では舌側面溝下端、歯冠のほぼ1/2の高さにピット状の着色を認めた。遠心面は歯質崩壊が著しく、歯冠部髓腔に大きな充填物を認めた。根尖は丸みを帯びた台形状を呈していた。抜去歯の計測結果(表1)では、歯冠の大き

さは反対側同名歯、及び藤田<sup>5)</sup>の平均値とほぼ同値であるが、歯根長は藤田<sup>5)</sup>の平均値に比べ1.7mm短かった。以上の所見から、抜去歯はその形態から右側上顎第1大臼歯で、かつて歯冠の1/2程度は萌出していたものと考えられた。

病理組織学的所見:歯髓組織は線維化、石灰化を伴い全体に変性傾向にあり、odontoblastの大部分は消失し、predentinの吸収も認められた(図6)。歯根部では象牙質の不規則な吸収とセメント質による置換がみられ、一部、著しい吸収のみられる部位で象牙質と骨組織が癒着し、歯根膜と連続する線維性結合組織の進入も認められた。また、ところにより hypercementosis が著明であった(図7)。さらに象牙質による根尖部の完成はみられず、根尖孔が開大したまま同部にセメント質が添加していたが、根尖を被うセメント質は薄かった(図8)。

確定診断:以上の臨床所見、病理所見より6低位歯と確定診断した。

## 考 察

第1大臼歯の埋伏の報告はいくつかみられ<sup>6-9)</sup>、当教室の岩崎<sup>10)</sup>も下顎第1大臼歯の埋伏例について報告している。一方、こうした真の埋伏に対して、かつて咬合をいとなんでいた歯が何らかの

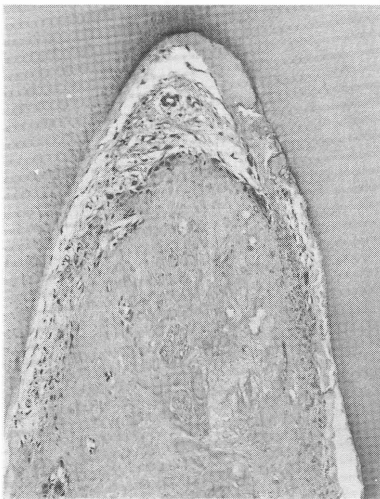


図6 病理組織学的所見

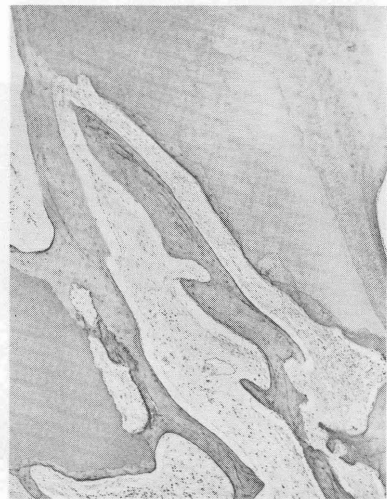


図7 病理組織学的所見

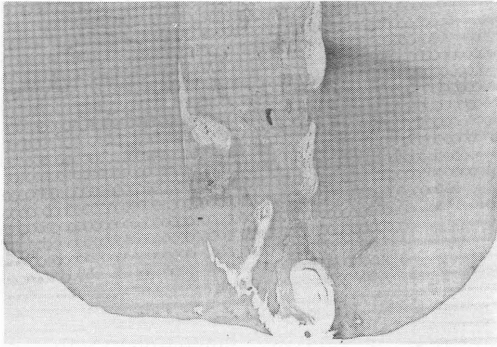


図8 病理組織学的所見

機転により低位を示す低位歯という概念がある<sup>2,4,11,12)</sup>。低位歯か半埋伏歯かの鑑別は、咬合の初期から経年的に観察されていない場合、咬合面の咬耗、充填物、う蝕の有無などを手がかりに推察するより手段がない<sup>1,13,14)</sup>。本症例でも、罹患歯の咬耗の所見、歯冠 1/2 相当の高さの脱灰・着色の所見、咬合面のアマルガム充填などから、罹患歯は半埋伏ではなく、かつては咬合していた低位歯であると診断した。

低位歯は主として乳臼歯について報告されているが<sup>11-16)</sup>、本症例の如く第1大臼歯にみられたものとしては本邦報告例はまれで、木次ら<sup>17)</sup>の上下顎1例ずつ2例、山形ら<sup>18)</sup>の下顎1例の報告があるにすぎない。

本症の発生機序として従来より主として二つの説が論じられている<sup>4,13)</sup>。一つは indirect depression, すなわち歯の骨性癒着と隣接歯の萌出により相対的に陥没したようになるとするものである。他の一つは direct depression, すなわち何らかの外力が作用し真の陥没が起こるとするもので、外力として隣接歯からの圧迫、咬合力、外傷などが考えられている。

本症例では現病歴、X線所見、抜去歯肉眼所見などから小学校高学年時に本歯の治療を受けた際、断髄処置をされたことがうかがわれる。上顎第1大臼歯の歯根完成は男性で11歳頃といわれており<sup>19)</sup>、治療時、根尖は未だ十分に完成していなかったことが推察される。一般に、根未完成歯の歯髄処置ではその後の根形成を損なわないように覆

髄もしくは生活断髄処置をすべきといわれているが、生活断髄法でも残存歯髄が慢性炎症を起こし壊死に陥り、放置すると根尖部、さらには根尖周囲にまで炎症が及ぶ危険性があるといわれている<sup>20)</sup>。本症例の病理組織学的所見で、歯髄は明らかに変性傾向を示し、また、根尖の一部は未完成の状態でセメント質により閉鎖されていた。また、象牙質の不規則な吸収、一部象牙質と骨組織との癒着がみられ、かつて慢性歯根膜炎、さらには骨性癒着があった可能性が示唆された。また、hypercementosis がみられ、咬合機能喪失などによる罹患歯歯根膜の廃用性萎縮を思わせた。一方、根尖部のセメント質の被覆は薄く、何らかの外力が作用し根尖部が吸収されたことがうかがわれた。外力として、まず、8、9歳頃の顔面外傷が考えられるが、左右の記憶があいまいであることや治療の既往もないことなどから、複根歯である6]を直接陥没させるほどの力が加わったとは考えにくい。次に隣接歯からの圧迫が考えられ、75] がそれぞれ近心、遠心に傾斜し6]に接していることから75]が萌出する際にその萌出力が6]を沈下させる方向に作用した可能性もあると思われる。

以上のことから、本症例の右側上顎第1大臼歯は、小児期に受けた断髄処置により歯の vitality が低下し、その後の歯根形成を阻害するとともに歯根膜を障害して歯の萌出力を弱めたことが考えられる。また経過中に骨性癒着を生じていた可能性もある。このようにして6]の萌出力が抑制され、その後隣接歯の萌出により相対的に低位をきたすとともに隣接歯の萌出力がさらに6]を圧迫、沈下させたことが推察される。したがって、本症の原因としては indirect depression, direct depression の両者が考えられた。高木<sup>13)</sup>も、著しい低位をきたすものでは何らかの外力が作用したと考えた方が理解しやすいと述べている。さらに山形ら<sup>18)</sup>は本症例と同様に小児期に受けた根管処置を契機として著明に低位を示した下顎第1大臼歯の症例を報告しており、若年者永久歯の歯髄処置に当たっては十分な注意と経過観察が必要である。

## 結 語



20歳、男性の上顎第1大臼歯にみられたまれな低位歯の1例を経験した。

低位歯の発生原因の一つとして小児期に受けた歯髄処置が考えられ、若年者永久歯の歯髄処置は慎重に行うべきと思われた。

本論文の要旨は第21回新潟歯学会総会（昭和63年4月）において発表した。

## 文 献

- 1) Pindborg, J. J. : Pathology of the hard dental tissues. P.241-252, W. B. Saunders Co., Philadelphia, 1970.
- 2) 石川梧朗, 秋吉正豊 : 口腔病理学 I. 改訂版 37-51頁, 永末書店, 京都, 1978.
- 3) 藤岡幸雄, 森田知生, 他 : 最近10年間の我が教室に於ける埋伏歯の臨床統計的観察. 口外誌, 8 : 13-17, 1962.
- 4) Schulze, C. : Thoma's Oral pathology. P. 153-155, Mosby Co., St. Louis, 1970.
- 5) 藤田恒太郎 : 歯の解剖学. 改訂14版, 70頁, 金原出版, 東京, 1967.
- 6) 味村 肇, 池田克己 : 上顎右側第1大臼歯の希有な埋伏の一例. 臨床歯科, 221 : 37-38, 1958.
- 7) 滝本和男, 作田 守, 他 : 埋伏水平下顎第1大臼歯の矯正治療により交差咬合の改善を得た1例. 日矯歯誌, 19 : 61-66, 1960.
- 8) 矢島好定 : 13年の経過を有し2コの埋伏臼歯を伴った慢性下顎骨骨髓炎の1例. 歯科評論, 226 : 53-55, 1961.
- 9) 西嶋克己, 石田利広, 他 : 濾胞性歯嚢胞と思われる下顎第1大臼歯埋伏の1例. 日口外誌, 21 : 593-598, 1975.
- 10) 岩崎二三男, 星山仁子, 他 : 下顎第1大臼歯の埋伏した1例—その原因に関する1考察—. 新潟歯学会誌, 6 : 70-76, 1976.
- 11) 榎 恵 : 低位乳臼歯と埋伏乳臼歯. 日矯歯誌, 11 : 22-28, 1943.
- 12) 福原達郎, 堀 悟 : 低位乳歯について. 日矯歯誌, 17 : 85-88, 1958.
- 13) 高木 実 : いわゆる Submerged tooth について. 歯界展望, 42 : 213-216, 1973.
- 14) 深沢範子, 野坂久美子, 他 : 家族的に出現した低位乳臼歯の症例. 小児歯誌, 15 : 52-61, 1977.
- 15) 嶋田 淳, 竹島 浩, 他 : 低位乳歯の1症例. 城歯大紀要, 15 : 743-747, 1986.
- 16) Kuron, J. : Infraocclusion of primary molars. An epidemiological, familial, longitudinal, clinical and histological study. Swedish Dent. J., Supplement 21, 1984.
- 17) 木次英五, 新藤潤一, 他 : 顎骨内に圧入されたと考えられる第1大臼歯の2例. 口科誌, 20 : 117-122, 1971.
- 18) 山形勇夫, 金子昌幸, 他 : 萌出後顎骨内に埋没の認められた下顎第1大臼歯の1例. 歯放, 16 : 26-31, 1976.
- 19) 金田義夫 : 日本人の永久歯に於ける歯根完成時期の研究. 歯科月報, 30 : 165-172, 1957.
- 20) 黒須一夫 : 小児の歯内療法. 131-151頁, 永末書店, 京都, 1988.